溝上慎一の教育論（動画チャンネル） No17（新著の紹介）

#8 西野毅朗著『日本のゼミナール教育』
ー学生の学びと成長を促す学習共同体の中核ー

溝上　慎一　　Shinichi Mizokami, Ph.D.

学校法人桐蔭学園 理事長
桐蔭横浜大学 教授

学校法人河合塾 教育研究開発本部 研究顧問

http://smizok.net/
E-mail mizokami@toin.ac.jp

【プロフィール】1970年生まれ。大阪府立茨木高校卒業。神戸大学教育学部卒業、1996年京都大学助手、講師、准教授、2014年教授を経て2018年に桐蔭学園へ。桐蔭横浜大学学長（2020-2021年）。京都大学博士（教育学）。
＊詳しくはスライド最後をご覧ください

※本動画チャンネルは溝上が個人的に作成・提供するものです。
公益財団法人電通育英会の助成を受けて行われています

（ご紹介）

西野毅朗

にしの たけろう

京都橘大学専任講師
教育開発・学習支援室、経営学部経営学科

同志社大学政策学部卒。同志社大学大学院社会学研究科教育文化学専攻後期博士課程修了。博士（教育文化学）。2016年に京都橘大学教育開発支援センターに着任、2021年より現職。専門は教育学（高等教育論、教育開発論）。
日本高等教育開発協会副会長、日本私立大学連盟研修委員。

単著として『日本のゼミナール教育』、共著書として『大学のＦＤ　Ｑ＆Ａ』『アクティブラーニング』『研究指導』（いずれも玉川大学出版部）『アクティブラーニングの活用』（医学書院）

新著の紹介

西野毅朗（2022）. 日本のゼミナール教育
－人文・社会科学領域等の学士課程教育における学習共同体－　玉川大学出版部

目次

第1章　戦前期のゼミナール教育
第2章　戦後期のゼミナール教育
第3章　教員視点で捉えるゼミナール教育
第4章　学生視点で捉えるゼミナール教育
第5章　エスノグラフィーの方法論と対象
第6章　専門ゼミナールへの導入過程
第7章　困難な課題への挑戦
第8章　関係性の変化と影響
第9章　就職活動と卒業研究と社会人生活
補章　　遠隔ゼミナール教育の姿
終章　　ゼミナール教育の過去・現在・未来

それではご覧ください

日本のゼミナール教育

京都橘大学　経営学部 経営学科／教育開発・学習支援室

専任講師　**西野 毅朗（にしの たけろう）**

nishino-ta@tachibana-u.ac.jp

『日本のゼミナール教育』

■ 序章 なぜゼミナール教育に注目するのか

第1部 ゼミナール教育の発展過程―歴史的アプローチ

■ 第1章 戦前期のゼミナール教育

■ 第2章 戦後期のゼミナール教育

第2部 ゼミナール教育の現状と課題―量的アプローチ

■ 第3章 教員視点で捉えるゼミナール教育

■ 第4章 学生視点で捉えるゼミナール教育

第3部 ゼミナール教育のエスノグラフィー―質的アプローチ

■ 第5章 エスノグラフィーの方法論と対象

■ 第6章 専門ゼミナールへの導入過程―2 年次演習

■ 第7章 困難な課題への挑戦―3 年次演習1

■ 第8章 関係性の変化と影響―3 年次演習2

■ 第9章 就職活動と卒業研究と社会人生活―4 年次演習

補章 遠隔ゼミナール教育の姿

終章 ゼミナール教育の過去・現在・未来

資料編

2022年3月刊行
玉川大学出版部

ゼミナール教育の過去

ゼミの歴史～誕生編～

●中世ヨーロッパの大学教育

・古典的知識枠組みの踏襲／研究は大学の外で
・購読（原典の正確な読解）と討論（饒舌を競うだけとの批判）

●近世ドイツの大学教育改革（18世紀～）

・国家目的に資する人材の育成
・実用的、実際的学問の育成

具体的な革新的方法として
導入されたのが…

ゼミナール教育

※seminarium「苗床」が語源
※例「言語学ゼミナール」「教育学ゼミナール」「神学ゼミナール」等
※自然科学系は“実験室教育”

●ゼミナールでは、古典読解・**論文発表**・討議が中心
⇒**人格形成＋筆記能力**（書く力）＋**会話能力**の集中的訓練の場
⇒高度専門職（国家官僚／宗教家／教師等）の育成が主目的
※当初は、奨学金も与えられる特定の学生を対象としたエリート教育

その後、**研究志向**が強くなり、奨学金もなくなり、**広く一般学生に**開かれるようになった。

ゼミの歴史～普及編～

●ゼミナール教育は各国に大きな影響を与えた

- 米国⇒ゼミナールを大学院教育へと昇華（ドイツ留学生が持ち帰った）
- 日本⇒ゼミナールを大学（学部）教育に活用（ドイツ人教師＋ドイツ留学生）

●日本の高等教育の始まりとゼミナール教育（明治～大正）

- 明治時代＝日本の高等教育の誕生（諸外国に学びながら、あるべき姿を模索）
  - 外国人教師＋外国留学経験のある日本人教師を中心に構築。
    （とりわけドイツ人教師やドイツ留学経験者がゼミナール教育を広めた）
- 京都帝国大学の挑戦と失敗
  - 京都帝国大学法科大学設立時に、東京帝国大学との差別化を図るべく、演習と卒論を必修化
    ⇒官僚試験合格率の低さ＋卒論の質の低さ⇒必修の撤廃
    ※経済・文学では、ゼミナール教育が拡大していった＝学問領域によっても導入度合いが異なる。
    （特に経済学ではフィールドリサーチも積極的に行った）
- 東京商科大学（現：一橋大学）1年次からの積極的にゼミナール教育を展開
- 私学でも積極的に導入（同志社、慶應義塾、早稲田）

ゼミの歴史～発展編～

- **戦後の教育問題にゼミナール教育を応用（昭和～平成）**
  - **1947年　新制大学スタート（3年制⇒4年制／一般教育の導入）**
    - 教養教育の理念を体現するために一般教育にゼミナール教育を応用（東京大学）
      - 「偏らない知識を持ち、どこまでも伸びていく真理探究の精神を育てるため」
  - **1960年代　大学紛争とマスプロ教育問題**　※マスプロ＝マスプロダクション（大量生産）
    - 社会学者マーチン・トロウの「高等教育の発展過程」説
      - エリート段階（進学率15%未満）⇒マス段階（15%～50%未満）
        ⇒マスプロ教育問題等が原因で大学と学生が対立
    - 問題解決策（少人数教育の実現策）としてゼミナール教育を応用
      - 「教養ゼミナール」「プロゼミナール」の広がり
  - **2000年代　高等教育のユニバーサル段階（50%以上）へ**
    - 高校から大学への円滑な移行を促す教育（初年次教育）を体現するために
      ゼミナール教育を応用＝「初年次ゼミナール」の広がり

ゼミの歴史から言えること

１．実務家養成vs（&）研究者養成

■研究活動が含む教育力（学習力）への期待

■**ゴールはどこ？？**

２．日本のゼミナール教育とは

■「学生－教員間および学生－学生間の緊密な対話によって知識・技能・態度を総合的に育成することを目指す少人数教育」

■**困ったときの「ゼミ」頼み**＝少人数教育としてのゼミ、大学への円滑な移行を促すゼミ、（学生支援機能も付与？）

３．ゼミナール教育の質は

■ゼミナール教育の質は向上しているか？（学生が成長するゼミとは？）

■卒業研究（論文）の質は問題ないのか？（何のための卒業研究・論文か？）

ゼミナール教育の現在

ゼミナール教育の実施状況

ゼミナール教育の種別実施状況

■専門ゼミ（98%）
■初年次ゼミ（79%）
■教養ゼミ（28%）

専門ゼミの履修制度（選択・必修）状況

■伝統的に必修（81%）
■伝統的に選択（14%）
■必修化（3%）
■選択化（2%）

全国人文・社会科学領域等の教育責任者（学科主任等）調査結果より
※2019年実施　※N＝694（回収率25.5%）

ゼミナール教育が有効と考えられている教育目標

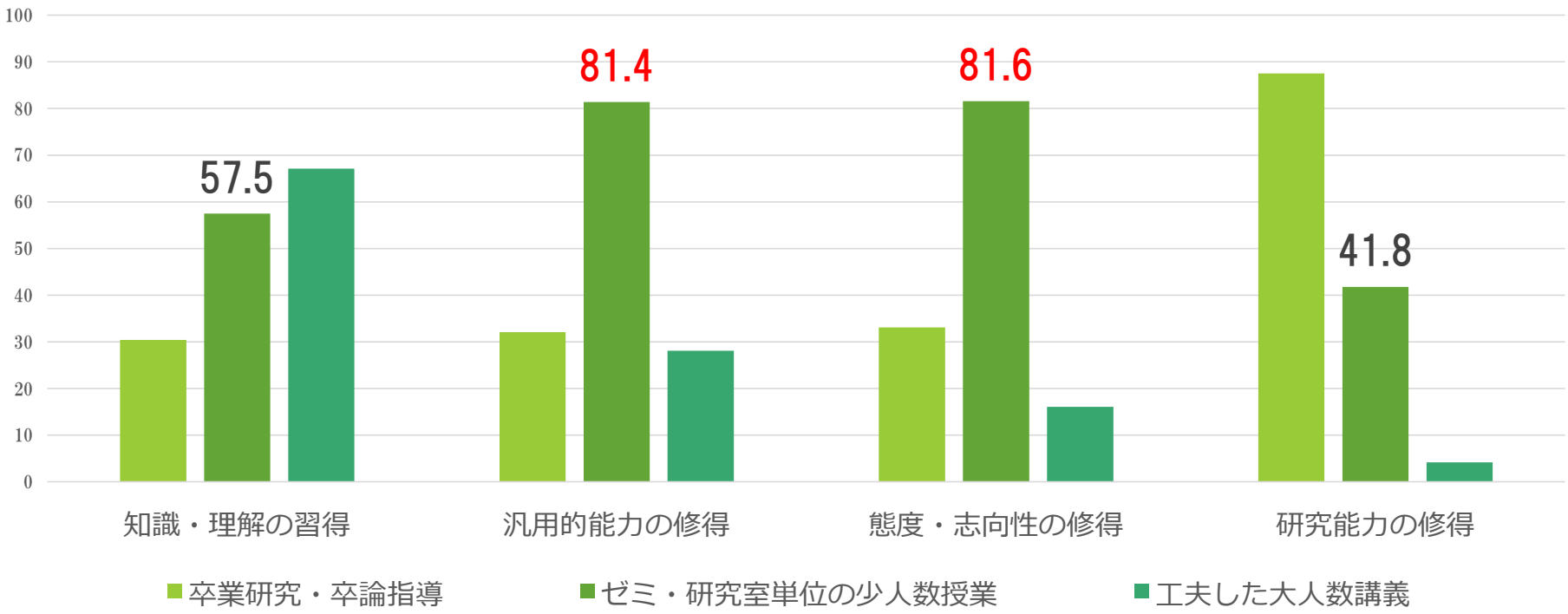
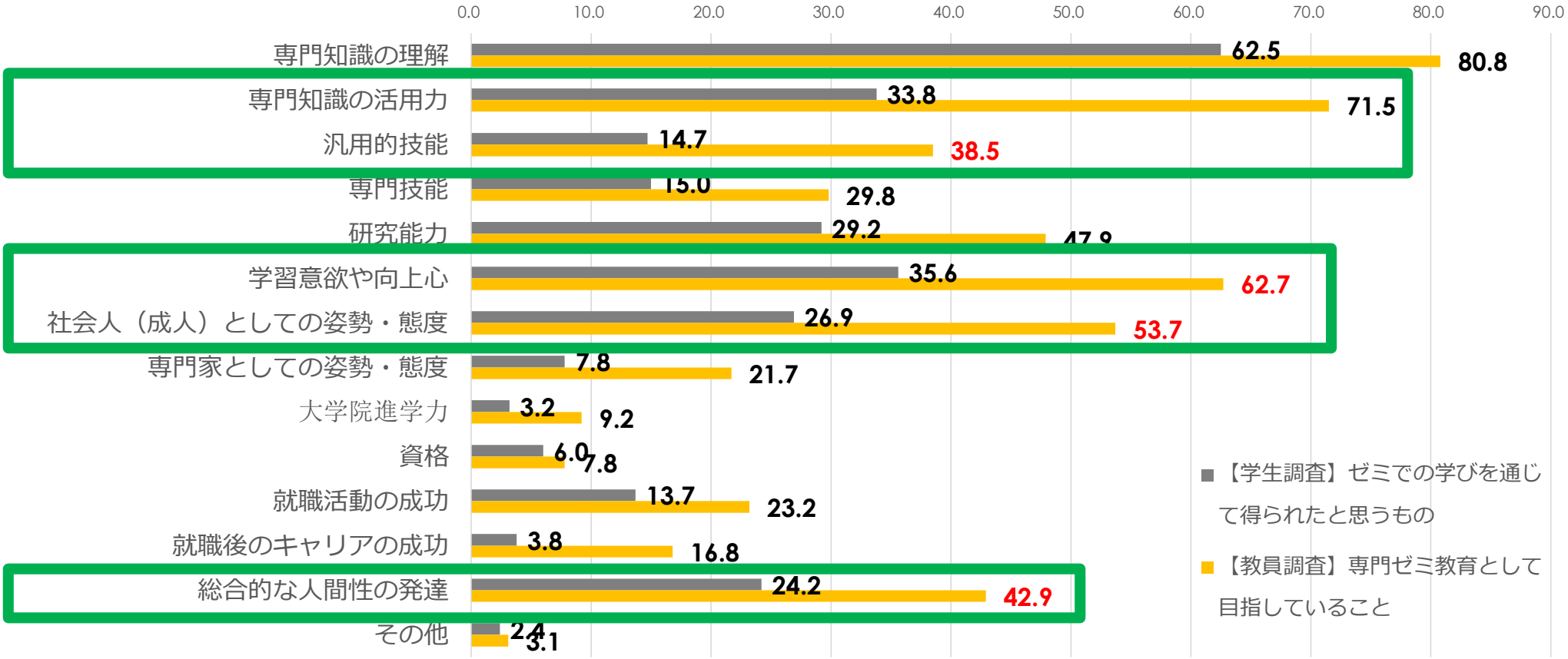


図　学士力の修得と授業・指導形態の有効性の関係（%）　(n= 2205)

【出典】東京大学大学院教育学研究科大学経営・政策研究センター（2012）「大学教員の授業観と教育行動」
http://ump.p.u-tokyo.ac.jp/crump/resource/kyoin_chosa.pdf（最終閲覧日：2016年3月3日）.

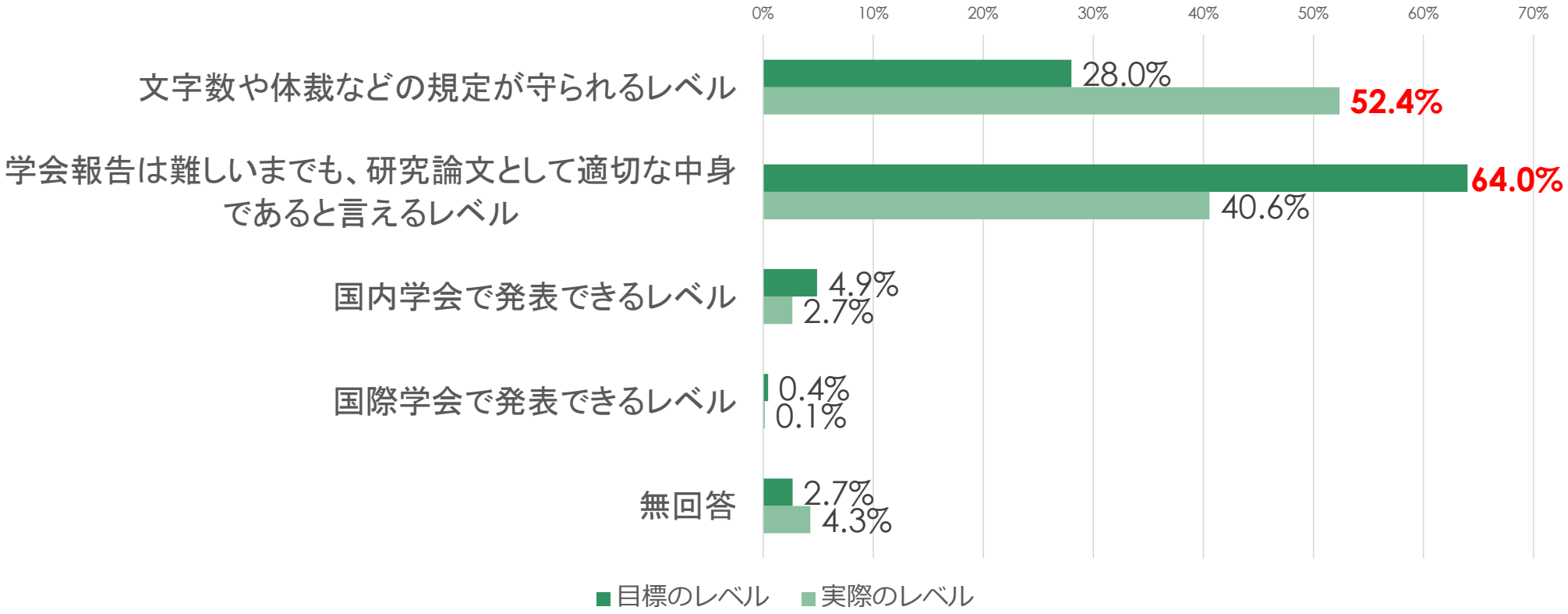
汎用的能力の修得／態度・志向性の修得に有効と考えられている

期待・目標・実感のギャップ



※先の全国人文・社会科学領域等の教育責任者（学科主任等）調査結果と、全国人文・社会科学等の4年次生調査結果の比較
※学生調査概要（2020年3月実施、N＝1030、マクロミル社によるインターネット調査）
※あてまる選択肢を全て選んでもらうチェックリスト方式の設問

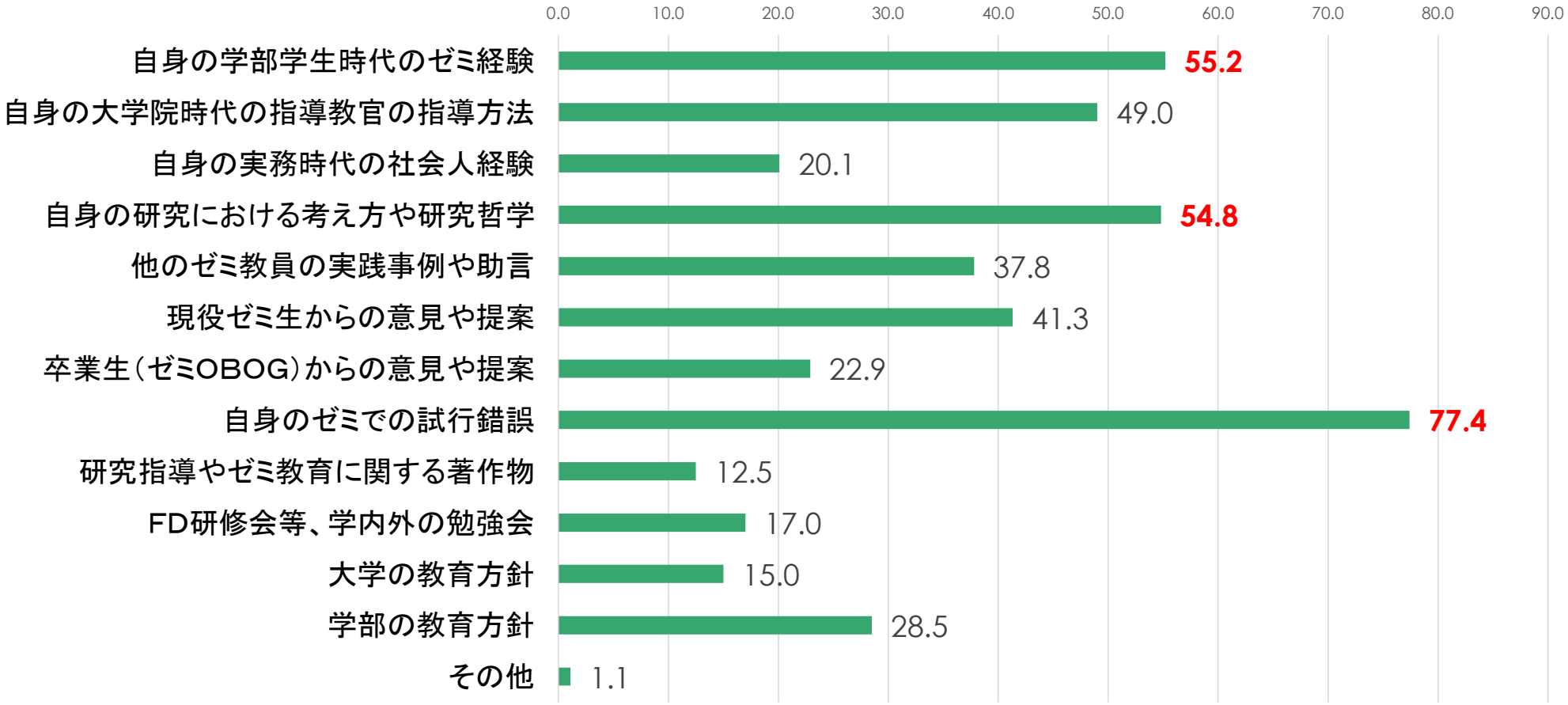
卒業論文の目標レベルと実際のレベル



全国人文・社会科学領域等の教育責任者（学科主任等）調査結果より

研究論文として適切とは言えないレベルが過半数を占める現状

専門ゼミの在り方に影響を与えているもの



教員個人の経験や考え方に頼ったゼミ運営

ゼミの現状から言えること

１．ゼミナール教育は学士課程教育を支える柱の１つ

■初年次ゼミから専門ゼミへ

■学士課程の総括としての卒業研究・卒業論文

２．期待・目標・実感ギャップをいかに埋めるか

■ゼミや、卒業研究・論文の目的・目標は何か？

■期待・目標・実感ギャップはなぜ存在しているのか？

３．３Ｋ教育のままで良いのか

■ゼミナール教育を支える３Ｋ＝（担当教員個人の）感覚、経験、考え方

■ギャップを埋めるためには、「３Ｋ頼り」からの脱却が必要ではないか

総括－ゼミナール教育の未来

３つの提言

１．ゼミナール教育の組織性と個別性を再検討する

■ ディプロマ・ポリシーと（専門）ゼミ科目との整合性の確認
■ 初年次ゼミから卒業研究までのカリキュラムの再検討
■ 卒業研究評価基準の検討

２．ゼミ教育FDを推進する

■ 各ゼミの実践、教育上の工夫の共有
■ ゼミに関わる教育上の専門知の獲得（反転授業、協同学習、自己調整学習等）
■ ゼミ研究の推進（実践の論文化）

３．オンラインツールを有効活用する

■ チャット・チャネル＝文字ベースでのやりとり／データの共有
■ ビデオ通話＝遠隔地からのゼミ参加、柔軟な個別指導
■ 共同編集＝成果物の質を高める

ご清聴いただき、
ありがとうございました。

ご質問やコメントなどがございましたら
こちらまでお寄せください。
nishino-ta@tachibana-u.ac.jp（西野）